

海外の話題

Thanksgiving Day (感謝祭)

農林中央金庫 ニューヨーク支店長 庄司 雅典

大晦日の夜、タイムズスクウェアで行われる「カウントダウン」はニューヨークの一大イベントです。100 万人とも言われる人々が街の一角に集まり年明けを祝います。しかし、正月のお祝いはそこまで。アメリカでは新年の祭日は元旦のみで、週末に当たらない限りオフィスも学校も 1 月 2 日から始まります。6 年前には、F R B が 1 月 3 日に利下げを行い大変驚いたこともありました。恐らくアメリカ人にとって元旦は、クリスマス休暇の最終日という位置づけなのでしょう。

しかし、彼らが 1 年の区切りを祝わないかということそうではありません。職場の同僚によれば、どうも 11 月第 4 木曜日のサンクスギビングデー(感謝祭)が日本の正月の位置づけに近いようです。感謝祭は日本人にとっては馴染みの薄い祝日ですが、その由来は 1670 年に遡ります。イギリスからメイフラワー号に乗ってマサチューセッツ州に上陸した、ピルグリムファーザーズと言われる移民の団が厳冬を経て翌秋、最初の収穫を迎えるにあたり、生き残った移民全員で、神のご加護と先住のインディアンの助けに感謝して行ったお祭りがはじまりと言われています。実に移民の国らしい祝日なのですが、この感謝の精神は今もアメリカ人の心に引き継がれています。

クリスマスはキリスト教徒のみが祝うのに対し、感謝祭では宗教の区別なくアメリカ人全てが 1 年の無事と翌年の幸せを祈ります。休みに合わせて故郷に帰省する人も多く、この前後は日本の帰省ラッシュと同様、全米の空港は大変混雑します。アメリカに住みながら感謝祭を祝う機会がないことは気の毒だということでしょうか、何度か、ある友人から家族ぐるみでサンクスギビングディナーに招待されたことがあります。アメリカンスピリットを感じさせるとても良い祝日です。

その友人は祖父母の代にドイツから移住したユダヤ系移民の 3 世です。両親が結婚してニュージャージー州の小さな町に家を購入したところ、たまたま隣人が同じドイツ出身のユダヤ系移民であったことから血縁の少ないもの同士、親しい付き合いが始まり、サンクスギビングデーには一緒にディナーを取りながら感謝祭を祝うようになったとのこと。その後、その友人も結婚、子供が生まれ、両親が他界し、集まるメンバーの世代交代は進みましたが、彼らの感謝祭ディナーは絶えることなく続いています。ディナー自体は昔ながらのかぼちゃ料理、七面鳥、マッシュポテトと意外

なほど質素ですが、父親がメインの七面鳥の丸焼きをさばき、家族に分け与える姿は昔の移住当時を彷彿とさせます。また、この日ばかりはホームレスの人々もボランティアから感謝祭ディナーを提供され、共に感謝祭を祝います。

一見、派手好きで個人主義を重んじ、力強すぎるように見えるアメリカ人も移民当時の純粋な感謝の気持ち、助け合いの精神を思い起こし、その大切さを次世代に引き継ごうとしていることに気づいて以来、彼らに大変親しみを感じるようになりました。普段、オフィスでアメリカ人の行動や考え方に戸惑うこともありますが、人としての内面は我々日本人と何ら変わらない、そういった思いにさせる感謝祭は私にとって意義深い祝日です。